

や放牧地は、シロツメクサ、アカツメクサ、セイヨウタンポポをはじめ、日本の路傍雑草に多く見られる欧州産帰化植物のふるさである。

このような夏緑樹林域に住む人々は、日本と同様に年々変わっては来ているが、それ独自の生活様式を持っている。それらについて書く紙面はないが、「散歩」についてふれておく。ここに住む老人達は、毎日散歩は欠せない日課である。背筋を伸ばし、足速に庭道やブナ林の中の道を歩き廻っている。休日には、友達や家族で歩いている姿をよく見かけることができる。そして、立止っては小鳥の声を聞き、

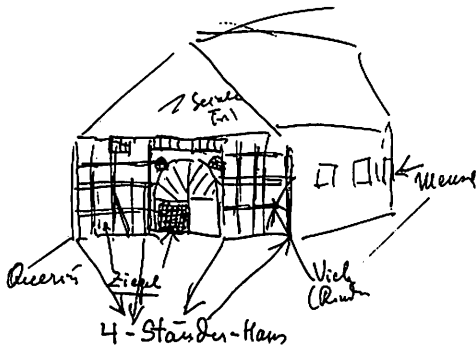


図4 西ドイツの古い農家の造り (R. Tüxen 画)

リスの姿を確かめ、咲いている草花を眺めては、父親らしき人が説明している様子をしばしば見て来た。欧米のナチュラリストの充実を聞くが、ここに自然教育の原点を見たように思えてならない。

3. チュクセン教授の最後

Tüxen 教授の下で指導を受けられるのは、最後の日本人になるのかという予感が、残念ながら現実となってしまった。リュウマチだと言っていた教授は、1月(1980年)中旬頃から左足大腿部の痛みが再発し、日毎に寝たままの研究生活となった。周囲の忠告も聞き入れず、論文を読み、書き、長年の文献カードの整理をすることによって、痛みを克服するかのようには仕事をされていた。しかし、衰弱は日を追って進み、5月16日未明、胸の上の台に読みかけの本を置いたまま亡くなってしまった。葬儀の最後の別れに、長男のDr. J. Tüxenに支えられて、若葉のブナの小枝を深い墓穴に手向ける Frau Tüxen の姿が、今もって忘れることができない。Tüxen 教授は、最も愛したブナ林の麓、トーデンマンの地に葬られている。私は、帰国直前に、夏休みで渡欧した家族を迎えて、すっかり深緑となったミズナラとブナの小枝を、墓前に添えて別れを告げ

た。Tüxen 教授の名は永久に残っても、静かな片田舎の隅に眠る墓地には、訪れる人も年毎に少なくなることだろう。

Tüxen 研究所には、10万点にものぼる文献資料が集められている。その整理は、実によく行届いていて、教授が作った文献カードですぐ目的の資料を取り出すことができる。この文献検索については、私は別にまとめて書いている(1981)。文献情報が激増し、その情報管理をいかにするかは、ますます重要な課題であると考えているからである。私などは、この千分の一にもならない資料を持て余して、狭い部屋中をその度にかき廻している。

Tüxen 教授は、すぐれた自然科学者であったと共に、秀でたシステムティストでもあったのである。植物群落のシステム化を成した植物社会学を育て上げた手腕には、この一面を見逃がすわけにはいかないだろう。

参考文献

市川健夫(1981):ブナ林帯文化, 信毎 1. 17.

O. Wilmanns(1978): Ökologische Pflanzensoziologie, pp. 351 Quelle & Meyer, Heidelberg.

P. Fukarek, Sarajevo(1964): Geobotanische Grundlagen für höhere systematische Einheiten der Waldgesellschaften. Pflanzensoziologische Systematik, J. Cramer, 98-111.

Tüxen, R. u. Wada, K. (1980): Bibliographia Phytosociologica Syntaxonomica — Querco-Fagetea (im Druck).

和田 清(1980):チュクセン教授のこと, 信毎 9. 30.

——(1981): R. Tüxen とその文献検索, 信大教育学部紀要 44, 185 - 189.

〔植物ニュース〕43. カラメトハギ *Lespedeza juncea* (L. f.) Pers.

松本市奈良井川二子橋下で1980年10月28日初見。帰化植物とされているが、気付いてみると少なくとも11月の調査では、その分布はメドハギに匹敵し、梓川では岩岡、梓橋双方でやはり同勢力。鎖川(梶海渡橋)及び南安島川(穂高橋)ではメドハギよりはるかに多い。県下の状況を知りたいものである。メドハギとの違いは、がく裂片が長く果実の頂にまで達すること、果実の表面が灰白毛に被われること、花期の遅いことなどである。(浅川富雄)